2015

成城大学 FD Activity Report

Faculty Development

はじめに：副学長・FD小委員会委員長ご挨拶
新任教員研修会
FD講演会
「ディープ・アクティブラーニング～深い学習を促す授業デザイン～」
FDワークショップ
「どこでも、どんなときでも、それも! アクティブラーニング
～参加者全員によるアクティブラーニングの発掘～」
高大接続に係る勉強会
「高大接続システム改革の狙いと方向性
～制度改革でどう変わるか～」
学生授業評価アンケート
各学部のFDへの取り組み
2016年度活動計画

SEIJO GAKUEN 100th since 1917

学生を懸命にさせる教育をめざして

はじめに

副学長
教育イノベーション委員会FD小委員会委員長
杉本 義行 教授

資質・能力の育成とFD活動

FD活動にかかる事業は、昨年度に教育イノベーション委員会FD小委員会に移管されましたが、おかげをもちましてこれらの事業を無事に実施することができました。皆様のご理解とご協力に感謝申し上げます。

すでにお気づきのように、本冊子は従来のFD活動報告と比較してよりハンディなものにスタイルを一新いたしました。こうした体裁の変更や内容等につきまして、忌憚のないご意見やご要望をお寄せいただきたいと思います。

さて、本年4月より戸部新学長のもとに新たな体制がスタートいたしました。ホームページに公表されている学長メッセージの中で、戸部学長は「大学が高度な知識を一方的に教授する場であればよかった時代は終わろうとしている」と指摘し、「多様な価値観が自己を主張し合う社会を生き抜く能力、これを身につける場へと、その存在意義は」変わってきたと述べられています。また、第2世紀プランのもとでの本学の教育改革は「懸命になることを学ぶ」ことを基盤としていると述べ、学生を中心にすえた教育をめざす本学の教育方針を確認し、大学教育の役割として「資質・能力（以下、コンピテンシーという）」の育成の重要性を指摘しております。

コンピテンシーが注目されたのは1990年代以降です。世界的にはOECD－DeSeCoの「キー・コンピテンシー」（2003年）やATC21Sによる「21世紀型スキル」が発表され、わが国でも2006年に経済産業省「社会人基礎力」が、また2008年には文部科学省の「学士力」などが次々と公表されました。こうした背景には、グローバリゼーションやIT化などの急速な社会の変化があります。すなわち、変化の激しい時代に対応するためには、専門知識をただ単に頭につめこむのではなく、それらを活用して多様な他者と協働し、現実の課題を解決する能力を培うことが重要なのです。初等中等教育での「学力の3要素」はまさにコンピテンシーであることを考えると、高大接続改革のひとつの側面は、初等中等教育から高等教育までをコンピテンシーという概念で接続した点にあると考えられます。

このように昨今の高等教育の潮流をとらえると、「懸命になることを学ぶ」教育の実現にはどのようなことが必要なのでしょうか。まず、第1に3つのポリシーの見直しに関連して、大学で身につけるべきコンピテンシーについて全学的に検討し、学生、教職員がそれを共有することが出発点であると思います。第2に、それぞれのコンピテンシーをどのような教育プログラムで育んでいくのかについて検討する必要があります。まさに組織的なFDの課題です。第3に、個々の授業レベルでは、目標とするコンピテンシーの育成のために適する授業技法や評価はなにかという視点です。授業技法に関しては、本年度のFD活動として、学生授業評価アンケートで高得点の先生方へのヒアリングをもとに「授業カタログ」を作成し、効果的な授業方法の共有を図ります。また、昨年度のFD講演会では深い学習を促すディープ・アクティブラーニングを取り上げ、また勝又あずさ先生による大規模教室でのアクティブラーニングの技法に関するワークショップの開催など、より実践的なテーマを取り上げるよう努めております。こうした機会を大いに活用していただき、「懸命になることを学ぶ」教育の実現に向けて、今後とも教職員の皆様のご理解とご協力を賜れば幸いです。

新任教員研修会

2015年4月11日（土）に、新任の先生方に一日でも早く本学をご理解いただき、円滑な教育活動を始めていただくための一助として、新任教員研修会を開催いたしました。専任教員は13：00～17：00、非常勤講師は13：15～16：25の時間帯で行いました。

参加者Voiceをご紹介!

上映されたDVDにより、理念と現状が理解でき、感動しました。

専任教員向け研修会の様子

学長による成城学園の建学の精神等の解説

建学の精神及び今後のビジョンについてのお話を特に興味深く聞かせて頂きました。

参加状況は、専任教員は対象者7名全員（経済学部1名、文芸学部5名、社会イノベーション学部1名）、非常勤講師は対象者53名のうち22名が参加されました。

設備を見て回るのが良かった。どこに何があるのか地図ではなく、足で実際に移動できたことで把握することができた。

図書館現地視察　アクティブラーニングエリアにて

教務部による解説の様子

授業に加え、全体像やハラスメント等、重要なことについて理解が深まった。

充実した内容でしたが、2時間程にまとめて頂けましたらありがたいです。

当日のスケジュールは次のページ▶

新任教員研修会 スケジュール

専任教員・非常勤講師共通スケジュール

内　容	担　当
・当日スケジュール等	FD 委員会 副委員長
・挨　拶	学長
・成城大学の沿革 ・これからの取り組み（学園創立 100 周年に向けて　第 2 世紀ビジョン） ・ミッション　ビジョン ・自己点検・評価と認証評価等	学長
・授業に関することについて 学則、学年暦、休講・補講、欠席届、公欠、教室使用・教室変更、機材設置、聴講生・科目等履修生、他学部聴講等 ・Campus Square for Web について 受講者名簿、成績入力等 ・試験、レポートについて 定期試験、追試、再試、試験施行内容登録等 ・成績について 成績評価・開示（評価分布含む）・問い合わせ制度等 ・シラバスについて 記載必須事項等 ・学生授業評価アンケートについて 実施要綱等	教務部
・ハラスメントについて	ハラスメント防止委員会
・特別な支援を必要とする学生について	バリアフリー委員会
・非常時（火災・地震等）の対応について	企画調整室
・教育研究用ネットワークとその利用について ・情報関連設備、外国語教育設備、教材作成設備とその利用について ・e-learning ツールとその利用について	MNC
・8 号館各教室、設備視察	MNC
・図書館現地視察 ・図書館の概要・利用方法について 他大学利用状況等	図書館

企画調整室による非常時の対応についての解説

メディアネットワークセンターによる設備利用等についての解説

8 号館現地視察の様子

専任教員にプラスした内容

内　容	担　当
・成城学園の建学の精神、教育理念等について（DVD）	教育研究所
・科学研究費助成事業について ・特別研究助成費について	研究機構事務室

非常勤講師にプラスした内容

内　容	担　当
・非常勤講師控室現地視察 ・非常勤講師控室の利用方法について等	非常勤講師控室

FD講演会

ディープ・アクティブラーニング
～深い学習を促す授業デザイン～

講　師　森 朋子先生（関西大学 教育推進部／教育開発支援センター准教授）
日　時　2015年10月19日（月）午後6時～7時30分

昨今、大学だけでなく高校においても、能動的な学習(アクティブラーニング)が授業手法として注目を集めていますが、他方、その問題点も指摘されています。

関西大学教育推進部准教授の森朋子先生をお招きし、単なるアクティブラーニングではなく、より深い学習を促す「ディープ・アクティブラーニング」の必要性とその具体的な手法についてお話いただきました。

森先生の講演に続く質疑応答の時間においては、出席者との活発な意見交換も行われ、出席者に提出いただいたアンケートには、「授業に取り入れたいと思いました」「内化→外化→内化のプロセスによる知識定着の仕組みが大変良く分かりました」「アクティブラーニングの様々な方法や効果等についてヒントを得られました」といった声が多く聞かれ、大変有意義な時間となりました。

また、本講演会は公開講演会として学外からの申し込みも受け付けたところ、当日は大学関係者をはじめ中学校高等学校の先生方や一般企業の方など28名の学外からの参加があり、参加者は総勢78名（内訳は下表参照）に上りました。当日の講演内容については、大学ホームページで公開しておりますので、ぜひご覧ください。

FD 講演会参加者内訳

所　属	人　数
学内：大学教員	25 名
学内：幼・初・中・高の教員	8 名
学内：職員	17 名
学外参加者	28 名
計	78 名

講演内容をWeb上で公開しております。

FDワークショップ

どこでも、どんなときでも、それも！アクティブラーニング

～参加者全員によるアクティブラーニングの発掘～

講　師　勝又 あずさ先生（成城大学 キャリアセンター 特別任用准教授）
日　時　2015年11月17日（火）午後6時～7時30分

本学で実施したアンケート調査結果によると、アクティブラーニングの導入については、「学生の学力・学習意欲」の偏りに加えて、主として講義科目での受講者数（クラスサイズ）や教室の機材・備品の不足等による「教室環境」が阻害要因として挙げられています。

そこで、本学のキャリア開発・キャリア教育を担当している勝又あずさ特別任用准教授をファシリテーターにお迎えし、クラスサイズや教室環境によらないアクティブラーニング型授業手法についてのワークショップを開催しました。当日は、学内外から40名（内訳は下表参照）の参加者があり、活発なグループワークやディスカッションが行われ、参加者全員で体験を共有することにより、「学び合いのプラットフォーム」が形成できました。当日の資料については、大学ホームページで公開していますので、ぜひご覧ください。

また、ワークショップ後の懇親会では、ポスターセッションのコーナーを設け、事前に申し出のあった3名の参加者からご自身の研究活動等の発表も行っていただきました。すでにFacebookでご覧になった方もいらっしゃると思いますが、学外からご参加の獨協医科大学基本医学情報教育部門教授の坂田信裕先生にはPepperとともに参加いただき、受付での参加者のお出迎えや懇親会での自己紹介も行っていただきました。

FD ワークショップ参加者内訳

所　属	人　数
学内：大学教員	11 名
学内：初・中・高の教員	6 名
学内：職員	4 名
学外参加者	19 名
計	40 名

（他、見学者（学内：大学教員）2 名）

講演会資料をWeb上で公開しております。

高大接続に係る勉強会

高大接続システム改革の狙いと方向性

～制度改革でどう変わるか～

講　師　小林 浩氏（リクルート進学総研所長/リクルート「カレッジマネジメント」編集長）

日　時　2015年12月7日（月）午後6時～7時30分

これまでの日本は、偏差値で序列化された中で、どうやって入学するかという「入学がゴール」の国といったところがありました。これからは、その大学で学んだ学生がどうなるのか、つまり「卒業がゴール」の国に向かっていく必要があります。入試の改革にとどまらず、従来の日本の考えまでも変えていこうとしている「高大接続改革」について、リクルート進学総研所長、リクルート「カレッジマネジメント」編集長の小林浩氏をお招きして勉強会を実施しました。

小林氏からは、高大接続システム改革の全体像とスケジュールなどについてポイントを踏まえた説明がなされるとともに、高大接続システム改革会議で議論されている事柄についても話題が触れられました。その中で、2015年12月22日に開催の高大接続システム改革会議では、「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」のサンプル問題が初めて提示される予定である旨の説明もありました。また、文部科学省では、入試改革から卒業認定の厳格化まで一貫した改革に取り組む国公私立大学への補助事業を新たに始める旨の紹介もなされました。

小林氏の講演に続く質疑応答の時間においては、勉強会出席者との活発な意見交換も行われました。当日は44名（内訳は下表参照）の参加者があり、中学校高等学校の先生方にもご参加いただきました。当日の講演内容については、大学ホームページで公開しておりますので、ぜひご覧ください。

高大接続に係る勉強会参加者内訳

所　属	人　数
学内：大学教員	23 名
学内：中学校高等学校教諭	5 名
学内：職員	16 名
計	44 名

講演内容をWeb上で公開しております。

学生授業評価アンケート

全学的な学生授業評価アンケートを大学、大学院の全科目を対象とし、前期、後期の2回実施いたしました。実施状況は、実施任意科目も含め、2,132科目中1,780科目（実施率83.5%）でした。

アンケートの集計結果は、Campus Squareで学内公開し、別途、科目別集計表を各科目担当者へ、大学全体集計表、科目開設部門別集計表、授業形態別集計表を学長、学部長、研究科長、共通教育研究センター長、国際センター長、キャリアセンター長へ報告いたしました。

なお、アンケート集計結果の概要および集計結果に対するコメントは大学ホームページに掲載しておりますのでご覧ください。

また、この集計結果を授業改善に役立てたいと考えておりますので、今後とも本アンケートにつきまして、ご協力いただきたくお願いいたします。

2015年度前期　授業評価アンケート集計結果　成城大学

対象	大学全体	実施対象科目数(A)+(B)	494	実施科目数(C)+(D)	449	延べ履修者数	19,436
		実施必須科目数(A)	291	実施科目数(C)	285	延べ回答者数	13,432
		実施任意科目数(B)	203	実施科目数(D)	164		

設問	項目	平均値	設問12との相関係数※1	回答数(人)／回答率(%) 5	4	3	2	1	有効回答数	無答・無効数
1	この授業によく出席した　出席率　⑤90%以上 ④89～80% ③79～70% ②69～50% ①49%以下	4.58	0.10	8,694 70.2	2,553 20.6	890 7.2	186 1.5	65 0.5	12,388	1,044
2	授業中意欲的に取り組んだ(ノートをとる等)	4.10	0.42	5,362 41.4	4,573 35.3	2,222 17.1	613 4.7	196 1.5	12,966	466
3	教員は授業時間を有効に利用した	4.31	0.63	6,907 53.2	3,975 30.6	1,480 11.4	436 3.4	182 1.4	12,980	452
4	休講または教員の遅刻が多かった　※2	4.33	0.16	584 4.5	772 6.0	1,112 8.6	1,746 13.5	8,734 67.5	12,948	484
5	教員の話し方は明瞭であった	4.17	0.64	6,335 49.0	3,719 28.8	1,903 14.7	677 5.2	293 2.3	12,927	505
6	この授業のレベルはあなたにとって適切であった	4.00	[illegible]	[illegible]	4,285	2,730 21.0	761 5.9	253 1.9	12,981	451
7	教員は教室内が学習にふさわしい状態に保たれるよう心掛けた	4.28					[illegible]	119	12,990	442
8	授業への教員の熱意を感じた	4.32								

2015年度後期　授業評価アンケート集計結果

対象	大学全体	実施対象科目数(A)+(B)	1,459
		実施必須科目数(A)	890
		実施任意科目数(B)	569

設問	項目	平均値	設問12との相関係数※1
1	この授業によく出席した　出席率　⑤90%以上 ④89～80% ③79～70% ②69～50% ①49%以下	4.52	0.15
2	授業中意欲的に取り組んだ(ノートをとる等)	4.10	0.41
3	教員は授業時間を有効に利用した	4.29	0.63
4	休講または教員の遅刻が多かった　※2	4.20	0.25
5	教員の話し方は明瞭であった	4.17	0.66
6	この授業のレベルはあなたにとって適切であった	4.01	0.64
7	教員は教室内が学習にふさわしい状態に保たれるよう心掛けた	4.25	0.64
8	授業への教員の熱意を感じた	4.33	0.6
9	教員は発言・議論等授業参加を積極的に促した	3.87	0.
10	シラバスと内容が一致していた	4.27	
11	この分野の関心と学力が得られた	4.19	
12	総合的にこの授業を評価できる	4.30	

スポーツ・ウエルネス実技以外の科目のみ回答

13	教員の板書、スライド等の文字は読みやすかった	4.12
14	予習または復習をよくした	3.41

スポーツ・ウエルネス実技の科目のみ回答

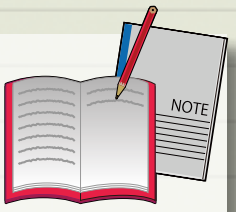
15	運動量は十分であった	4

成城大学　授業評価アンケート

アンケート集計結果はWeb上で公開しております。▶

各学部のFDへの取り組み1

経済学部におけるFD活動報告



経済学部
上田 晋一 教授

経済学部では、2017年度に成城学園100周年をむかえることを受けて、目下、既存の教育カリキュラムの見直しと、新カリキュラムの実施に向けた議論が進行中である。昨年度は、学部および学科レベルで、現行カリキュラムの課題の把握につとめるとともに、カリキュラム改革の方向性に関して、多用かつ活発な議論が交わされてきた。本稿では、これらの議論を経て洗い出された課題について、経済学部におけるFD活動と関連付けながら報告することとしたい。

(1) セメスター制度への移行に関して

現行カリキュラムは、年間の受講を義務づける通年制をベースにしており、半期科目は、一部の専門科目か、または自由設計科目として履修可能なものなど、ごく一部に限られている。よりきめ細かい教育を実践する観点、また秋卒業制度の導入も視野に入れながら、現状の通年制から半期セメスター制度への完全移行が可能かどうかについて前向きに議論が行われているところである。

(2) ゼミナール必修制度に関して

経済学部のカリキュラムの最大の特色は、3年間一貫教育を原則とするゼミ制度である。すなわち、2年次に選択したゼミ教員のもとで、卒業論文の完成まで継続的に指導を受ける体制である。このような一貫教育は、綿密な専門的教育と、学園の理念である全人教育の具体的実践である。また、昨今重要性が増しているアクティブ・ラーニングに関しても、このゼミ制度のもとで相当程度の経験を有している。一方で、学生のやむを得ぬ進路変更や志向の変化に対して硬直的になるという課題も指摘されている。経済学部が蓄積してきた経験を活かし、これを引き継ぐことを基本路線としながら、予想される課題への対応について検討しているところである。

(3) 初年次教育の強化に関して

現行カリキュラムでは、各種の語学クラスに加えて、「経済学講義・演習」「基礎簿記」等の少人数制授業や、専門科目への導入的科目としての「経済と社会」「ビジネス概論」等が配置されており、一定の教育効果を上げてきた。ただし、今後は高大接続のいっそうの強化や基礎学力のさらなる向上が求められることは衆目の一致するところであり、経済学部としても、少人数制クラスの拡充や導入的科目の内容面の見直しなどの可能性を検討しているところである。

(4) 専門科目教育の強化に関して

専門科目の大半は、2年次以降に履修可能なものとして配置されている。現行のこうしたカリキュラムは、学生の志向に合わせた柔軟な履修を可能にさせる効果がある一方で、段階的な系統履修がやや手薄になっているという課題もある。既存科目の学年別配当、科目の新設、ナンバリング制の導入など、学部としての専門教育強化のための可能性を模索しているところである。

(5) 人材育成の目的の達成の重要性に関して

学部教育の最終的な狙いは、学部として掲記する人材育成の目的の達成と、それによる教育の質保証にある。経済学部でも、カリキュラムを見直す過程では、個別具体的な課題への対応だけではなく、人材育成の目的との整合性を絶えず再確認する必要があることも強く認識され共有された。とりわけ、教育の受益者である学生サイドからみて、人材育成の目的の到達に至るまでの可視化されたカリキュラムを提示するという視点は重要であり、この点に関連して、教育イノベーション委員会FD小委員会主催の「FD講演会」や「6大学合同FD・SD研修会」へ経済学部から多数の参加を通して、学部メンバーの意識向上が図られてきたことは確かである。

以上述べてきたように、経済学部では、既存カリキュラムの課題の洗い出しと今後の改革の方向性を中心に、活発な議論が交わされている最中である。次年度では、これら諸論点を踏まえ、新カリキュラムの具体化の作業が行われる予定である。学園創立100周年に向けて、これまで以上に高品質な教育を提供できる体制整備が進みつつある。

各学部のFDへの取り組み2

文芸学部の新カリキュラム導入初年度におけるFD活動

文芸学部
木下 誠 准教授

文芸学部は「第2世紀の成城教育」へ向けて、いち早くあらたなカリキュラムを導入した。その1年目の2015年度は、初年次教育の科目がおもな対象となった。ここでは少人数教育を軸とした学部新カリキュラムのFD活動のなかから、1年生必修科目の「WRD」と、外国語教育のうちでほぼ全員が履修する英語科目に関連した具体的取り組みに焦点を当てて報告する。

いま「WRD」と記したが、厳密に言えば新カリキュラムのシラバスには「WRD」という名称の授業はない。以前は通年科目だった「WRD」を内容面から半期ずつの科目に分けて、前期を「WRDⅠ」、後期を「WRDⅡ」としたからである（以下、「WRD科目」は新カリキュラムの「WRDⅠ」「WRDⅡ」両方をまとめて指している）。この再編成により、以前よりも統一的な目標に向けた授業を提供することとなった。「WRDⅠ」は統一シラバスをもとに、学問的思考として主体的に問題意識を持つことと、論文（研究レポート）のルールを学んでひとりで作成できるようになることを共通の到達目標としている。「WRDⅡ」は前期の学びをさらに深化させて4コースを設置し、それぞれ「書く（W）」「読む（R）」「観察する（RE）」「議論する（D）」に特化した。なお、「WRDⅡ」の履修に関しては、受講生は希望するクラスを4コースのなかからあらかじめ選んで申請し（「観察する（RE）」が必修のマスコミュニケーション学科を除く）、抽選の結果いずれか1つのクラスに登録される。

このような文芸学部初年次教育の根幹をなすWRD科目のFD活動として、まずは2015年度にWRD科目担当予定の専任・非常勤の教員を集めた連絡会を、前年度末に開催した。その場では、共通教育研究センターWRD部会作成による冊子『「WRDⅠ・Ⅱ」教員資料（2015年度版）』が配布された。記載項目は以下のとおり――「目的」「設置経緯」「科目の位置付けと履修方法」「WRDⅠに関わる授業運営」「WRDⅡに関わる授業運営」「授業運営のためのヒント」。この資料内容をおさえることで、いわゆる「教育の質保証」に向けたコンセンサスを図った。なかでも、統一シラバスによる授業運営上の共通項目として授業担当者が共有すべきこと、授業計画における注意点や成績評価の基準と方法などについて確認した。この連絡会において、従来の通年科目「WRD」の担当経験がある教員は半期科目「WRDⅠ」「WRDⅡ」それぞれのあらたな趣旨を、はじめてWRDに携わる教員（非常勤講師をふくむ）は学部初年次教育の根幹科目としての重要性を、認識したことと思われる。

さらに、前期「WRDⅠ」の終了時にも授業担当者を集めた連絡会を開催した。出席した教員はそれぞれ、具体的な授業内容、教科書やプリント等の教材活用、授業運営で工夫した点あるいは苦労した点、おなじく新設の科目「文芸講座」との連携および冊子『文芸講座読本　古典と文化』の活用方法、学生たちの反応や出欠状況・参加度などについて報告した。この意見・情報交換は、ひきつづき前期担当者が受け持つ後期「WRDⅡ」、さらには次年度以降のWRD科目の授業運営の改善に活かされることとなる。

WRD科目を担当した（2016年度も担当している）者として個人的な感想を述べさせていただくと、前期終了時の連絡会での意見・情報交換はたいへん有益であった。他の学科の教員、自分とは異なる専門分野を研究対象としている教員が、どのように自分と同じ科目のクラスを運営しているのかを聞くことができる機会は、（公式には）ひじょうに限られている。6学科の新入生がクラスに混在するため特定の専門的話題に偏らないように配慮し、大学で学ぶためのスキルを確実に伝えながら同時に知的好奇心全般をかきたてようとするときのハードルの高さ、しかしそれゆえに教育の醍醐味を味わえるWRDのような科目においてこそ、授業担当教員を中心とした連絡会などFD活動の成果が活きてくるのではないかと実感した。

ではつづいて、新カリキュラムの英語科目におけるFD活動について簡単に報告する。

今回のカリキュラム改訂により、文芸学部の初年次英語カリキュラムは、各クラス受講者数が15名程度の少人数教育のアクティヴ・ラーニングを目指した「SEE」（Seijo Essential Englishの略）として、前期「SEE-A」後期「SEE-B」を設置した。受講生は、入学前にプレイスメントテストとして受験したCASEC試験の点数をもとに、各自の英語力に適したクラスに配置されることになる。前後期とも、Reading とListeningを中心とするInputクラスと、SpeakingとWritingを中心とするOutputクラスの週2回展開である。また、アクティヴ・ラーニングの一環として授業時間外の学習時間を十分に確保することと、InputクラスとOutputクラスの授業内容を有機的に連動させることをおもな目的として、受講生にはWeb教材のALC NetAcademy2のシラバスで指定された単元を自宅学習して毎回授業に臨むことを必須とした。

ALC NetAcademy2の授業での活用方法およびInputクラスとOutputクラスの連携、さらにはアクティヴ・ラーニングの趣旨については、新カリキュラム導入前の年度末に2015年度授業担当予定者を集めて説明会を開催したが、実際に前期の授業運営をしたのちの意見交換の場として、7月初旬の週の4日間、昼休みを使って「SEE連絡会」を開催した。もっとも多かった声は、1クラスの受講者数15名程度という少人制がアクティヴ・ラーニングの授業形態にたいへん良い影響を与えている、というものであった。少人数ゆえに、教員は個々の学生に十分配慮して授業を進められ、学生たちの積極的な発言を促すことが可能となった。またこの連絡会では、InputクラスとOutputクラス担当教員同士の連携をあらためて確認し、とくに授業連携がうまくいっているペアには、具体的な事例を報告していただいた。問題点としては、ALC NetAcademy2の自宅学習の状況確認が、非常勤の先生方（とくに英語ネイティヴ・スピーカーの教員）にとって使い勝手が悪い、というものであった。この件に関しては、学期末の成績評価に直接関わる部分については専任教員が補助できる方法（クラスの学習状況一覧をプリントアウトして担当者に渡す、等）を提案し、ALC教材の授業への活用についてはさっそく後期「SEE-B」に向けて一部修正を施した。この「SEE連絡会」で寄せられたその他の多くの細かな疑問点や意見に対しては、SEEの運営を担当する英文学科からの応答を文書にして、さらに後日夕刻に開催された「SEE報告会」にて配布した（出席できなかった先生方には、メール等でお送りした）。なお、この学期末「SEE報告会」では、非常勤の先生2 名にInputとOutputクラスのアクティヴ・ラーニングの事例を紹介していただき、意見交換をおこなった。

後期も前期同様の形態で「SEE連絡会」を開催した。後期「SEE-B」の成績には、定期試験期間中に実施するCASEC試験の点数も加えられるため、成績評価の配分について、また通常授業の期末試験の実施方法について、あらためて確認した。前期の連絡会でもALC NetAcademy2の活用をめぐってさまざまな意見が寄せられたが、後期の状況を踏まえて次年度に向けさらに検討を重ねることとなった。なお、2016年度から2年次以上を対象にした新カリキュラムの英語科目「中級総合」「上級」が始まるので、後期の連絡会では次年度にSEE以外を担当する予定の先生方にもお越しいただき、2年次以上の新設クラスの趣旨を説明した。

以上、文芸学部の新カリキュラムにおける初年次導入教育・外国語科目のFD活動の一部具体的事例を報告した。カリキュラム再編の際のあらたな試みに込められた教育理念を、どのように実際の授業運営において実行するかが重要である。とくに本稿で取り上げたWRD科目や外国語科目のように、学科専門科目とは異なり、全6学科の学生たちが合同で受講する授業においては、共通の到達目標に向けて、FD活動を通した教員間の意見や情報のやりとりおよび連携はなにより有益なものとなるだろう。今後のFD活動がさらなる教育の改善に資することとなるよう期待される。

2016年度活動計画

- 2016年 4月 ● 新任教員研修会
- 2016年 7月 ● 成城大学FD Activity Report 2015発行
  - ● 2015年度学生授業評価アンケート集計結果報告、公開
  - ● 前期学生授業評価アンケートの実施
- 2016年 9月 ● 初年次教育学会第9回全国大会参加
- 2016年10月 ● 前期学生授業評価アンケート集計結果報告、公開
- 2016年12月 ● 後期学生授業評価アンケートの実施
- 2017年 3月 ● 2017年度事業計画、予算概算要求書確定

※1　時期が未定の事業
- FDにかかる研修会参加、他大視察
- FD・SD講演会・ワークショップ
- 授業カタログ発行

※2　事情により、上記の予定が変更になる場合があります。

成城大学教育イノベーション委員会FD小委員会委員（2016.5.1現在）

委員長　杉本義行（教育イノベーション委員会委員長／副学長／教育イノベーションセンター長／全学共通教育運営協議会議長）

委　員　林田伸一（教務部長）
木下　誠（文芸学部）
平井康大（社会イノベーション学部）
川　淳一（法学研究科）
中村睦久（事務局長）
上田晋一（経済学部／経済学研究科）
新山一雄（法学部）
宮﨑修多（文学研究科）
伊地知寛博（社会イノベーション研究科）

発行日　2016年7月
成城大学教育イノベーション委員会 FD 小委員会委員（2015.5.26 現在）
委員長　杉本義行（教育イノベーション委員会委員長／教育イノベーションセンター長／全学共通教育運営協議会議長）
委　員　林田伸一（教務部長）　岩﨑尚人（経済学部）　木下　誠（文芸学部）　新山一雄（法学部）　平井康大（社会イノベーション学部）　上田晋一（経済学研究科）
宮﨑修多（文学研究科）　川　淳一（法学研究科）　伊地知寛博（社会イノベーション研究科）　中村睦久（事務局長）